
プールサイド

北川竜司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プールサイド

【Nコード】

N24830

【作者名】

北川竜司

【あらすじ】

中学時代に水泳部だった水瀬紗希みなせさきは高校の水泳同好会（廃部寸前）に入会し、中学時代に水泳部、ではなかった葛西雄輝かさいゆうきを巻き込んで『水泳部復活』を目指す。

恋愛経験ゼロの葛西と、人見知りしない積極的な美少女ヒロイン水瀬の少し恥かしい青春ラブストーリーが始まる。

春の嵐

受験で頑張っていたときのことは今では遠い過去。

4月。いよいよ高校生活が始まる。

透き通るような青い空。

どこまでも続く桃色の桜並木。

心地よい春の風。

ではなく…。

今日はやけに風が強く、その風の勢いによって猛烈な雨が降っている。

僕、葛西雄輝かさいゆうきは、必死で傘にしがみつくような格好をしながら海風館高校の正門を通り抜けた。

「せつかくの入学式だっていうのに…。」

ズボンのすそやカバンは既にビショビショ。この入学式の日に似つかわしくない天気は、

僕のこれからの厳しい高校生活を予見しているのか。

ぶつぶつとネガティブな独り言をつぶやきながら昇降口の前にただり着いたその時、

びゅうつっ!! バキッ!!

突風と同時に何かが折れる音がした。(傘、折れたか…。いや、

大丈夫みたい。)

僕は自分の傘の無事を確認して昇降口へ入った。ここは屋根があるにもかかわらず、

少し奥の床まで濡れていて雨の激しさを物語っていた。

(さっきの音、何が折れたんだろ?)

辺りをキョロキョロすると、昇降口の軒の下で悲しそうな顔をした制服姿の女の子が一人。

その女の子は青い傘にしゃべりかけた。

「ごめんなさい。私がすっかりしてないから折れちゃったのね。痛かった?」

背中の中ん中くらいまである黒髪のストレートヘアに大きな瞳の美少女。

体は細身ではあるが、なで肩ではないため痩せているという印象はうけない。

何かスポーツでもやっているのだろうか。それにしても『かわいい』傘は折れてしまったが、彼女はあまり雨に濡れてはいない様子だった。

「まったく、嫌な天気よね。入学式つてもっと爽快であるべきじゃない?」

空は青くて、ピンク色の桜があたり一面に咲いていて…。」

さっきの純粹で悲しげな雰囲気とは打って変わって、くだけた言葉を発した。

(ん?) “あるべきじゃない?” (って)。

辺りを見回すと数人の生徒がいた。でも、彼らとの距離は僕と彼女と少し離れている。

一番近いのは彼女と僕。これって僕に話しかけている? 初対面の僕にいきなり?

これが友達同士の会話なら「そうだね、なんかこの先思いやられる

よね。」

と自然な返事をするのだろうか、僕は彼女を知らない。
緊張した僕は何を思ったのか、

「はっ！！ そーあるべきであります！！」

と、思わず軍隊の上官に敬礼するかのようなポーズと発言をしてしまった。

僕が言動と行動がおかしかったのか、彼女は「ぶっ」と噴出て、次に「キリっ」として

「君に任務を与える！！ もし、帰りまでに雨がやまなかった場合、君の傘に私を入れること！！ 上官の命令は絶対である！！」

突然の寸劇。これは運命の出会い…、なのか？

昇降口の下駄箱を抜けると壁にクラス割の表が貼り出されていた。僕の名前は1年B組にあった。

ふと横を見ると、上官（？）もクラス割の表を見ていた。新入生なのか？

（もしかして同じクラスかも…。）

「あっ！！ あった！！」

上官の視線はB組ではなくA組を向いていた。どうやらクラスは違うみたいだ。

「クラスは分かったけど、これからどうすればいいのかしら。」

確かに…、と思ったが、入学式の前に郵送で送られてきた『入学式

のしおり』に

当日の手順が載っていたことを思い出した。

僕はカバンの中から『入学式のしおり』を取り出した。雨のせいで少し濡れてるけど…。

かなり緊張しているが、思い切って上官にしおりのことを助言してみた。

「そ、そういえば、このしおりによるとクラス割を確認したら教室へ行くように書かれてるよ。」

地図も載ってるし。」

「へー、そうなんだ。さすが！ 用意周到ね。」

「それほどでも…」

「じゃあ、一緒に連れてってくれない？ お願い！」

僕は地図をたよりに教室へと向かった。

初めて通る高校の廊下をかわいい女の子と歩いているせいか、緊張して

何もしゃべりかけることができなかった。

一方、上官はというと、これと言って緊張した様子はない。むしろ落ち着いている。

「ここがA組ね。あなたはB組だからこっちね。」

「そうみたいだね。へへへ…。」

「ありがとう。すっごく助かったわ。」

「そ、そう思ってもらえると…、嬉しいよ。」

「それじゃ、もし雨が降ってたら、帰りはよろしくね。」

上官はバイバイと手を振ってA組の教室へと入っていた。

あの寸劇の中で言っていたことは冗談じゃなかったんだと確信した。

僕はB組の教室に入ると黒板には『ようこそ海風館高校へ。お好きな席へどうぞ。』

と書かれていた。後ろから2番目の窓際の席が空いていたので迷わずそこへ座った。

辺りを見回してみると、知り合いはいない。と、思っていたが何やら隣に見覚えのある顔があった。

「あつ!!」

僕と、そしてもう一人の男子の声が同時に重なった。

「雄輝じゃないか!! まさかお前と同じクラスとは。」

「やっぱり正人か!!」

彼の名は吉澤正人^{よしざわまさひと}。僕の親友だ。

中学の頃は僕が陸上部で正人が水泳部だった。部はちがっても部活間の親睦は深く、

よく合同合宿なんかもやってた。僕はふと疑問に思った。

正人の水泳の実績はすばらしく、強豪校から逆指名を受けていた。

海風館はというと、水泳部は廃部寸前だと聞いている。

なぜ海風館……。入学早々、込み入った話をするのも何なので、あえてその話題に触れるのはやめた。

僕らは中学時代の昔話に花を咲かせた後、入学式の時間を確認した。

「正人、入学式って何時からだっけ？」

「たしか10:00からだよな。」

「まだ時間あるし、ちよつと学校の中を探検してみないか？」

「初日からやけに積極的だな。何か珍しいものでもあるのか？」
「いや、別に。まあ、とにかく行こうよ。」

僕たちは教室を出て廊下を歩いた。まだ窓の向こうの雨は止まない。空は鉛色で、それが果てしなく広がっている。

空の果てからA組の教室の中に目を移すと何やら物憂げな顔をして窓の外を眺めている少女がいた。上官…。

「おいつ！ 雄輝。」

ハツとして僕は正人に謝る。

「あ、いや、ごめん。ちよっと考え事していた。」

「いきなり立ち止まって黙るなよ。っつーか、どうかしたのか？
変だぞ。…っお、あれは確か。」

正人の視線と僕の視線が上官の方に向いた。上官と正人と知り合いなのか？

それとも…、知り合い以上の関係なのか。知り合い以上の関係ってなんだ？

もしかして正人のカノジヨ？ いや、それはないだろう。

カノジヨなのに”あれは確か”なんて言わないよな、ふっつう。

僕の妄想は歯止めが効かなくなる。

「ミナセ サキ。」

正人の一言に対して僕は尋ねた。

「もしかして、知っているのか！！ 上官のこと…。」

「上官？ 何言ってるんだ？ お前。」

「いや、彼女のこと、知ってるのか？」

「ああ。彼女の名前は水瀬紗希^{みなせさき}。

俺たちのライバル校だった東中の水泳部だ^{ひがしちゅう}。

水泳をやっている彼女を知らないヤツはいないよ。結構有名だったからな。」

そうか、有名人なのか。でもどのようにならるのだろうか？

水泳をやっている人はみんな知ってるってことは、

きっといつも大会で優秀圏内にいるとか、そういうことだろう。

でも、それはあくまで僕の想像。

どうして有名なのかを尋ねようとしたが、先に正人のほうが口を開いた。

「ちなみに有名っていつでも、実績のことじゃないからな。

確かに彼女は中学二年の夏、100m自由型で六位入賞した。全国大会でね。

「ただとそれだけじゃない。」

正人の話に耳を傾ける。じゃあ何で有名なのか？

次の言葉でそれが分かると思うと、好奇心に胸が躍る。

「お、入学式の間だ。そろそろ教室戻るか。」

正人に肩透かしに、僕は思わずズッコケそうになった。

一体何が有名なのか？ 少なくとも僕にとっては有名じゃない。

水瀬沙希。彼女のことが知りたくなった。水瀬さんと、話がしたくなかった。

雨よ、ごめん。 今日一日、ずっと降り続いていてくれ。

あの日の君

空のオレンジ色がアスファルトの水溜りに浮かんでいる。朝から降り続いていた雨は放課後にはすっかり止んでいた。寸劇での約束は無効。期待していた分、落ち込んでしまう。

（まあ、付き合っているって関係でもないし、ましてや今日が初対面なんだから

いきなり一緒に帰るなんて出来過ぎた話だよな。）

それにしても、なんだかさっきから背中がツンツン痛い。

「正人、先に帰ったんじゃないのか。もうやめてくれ。痛い。」

僕はムツとして言ったつもりだが、正人はやめようとしめない。

「騒ぐな…、騒いだらこいつでお前の背中を突き刺すぞ！」

僕の背中からハスキーな低い女性の声が出た。それは正人の声ではない。

「そのまま正門へ向かって歩け。絶対に後ろを向くんじゃねえぞ！」

僕はビクツとして女の声に従いゆっくりと前へ進んだ。一步、二歩、三歩、四歩…ん？

クスクスという笑い声に思わず後ろを振り向いてしまった。

「もしかして、水瀬、さん…？」

彼女は口元に指先を当ててクスクスと笑い続けていた。そして残念そうに、かつ、

かわいらしく文句を言った。

「もー、なんでこっちむいちゃうのよー。とつてもスリリングだったのにい。もうもっつー!!」

彼女からしてみれば、この『寸劇』はスリリングだったかもしれないが、

僕にとってはこんなに至近距離で水瀬さんと向かい合っていることがスリリングでたまらない。

僕は緊張のあまり暫く言葉を失ってしまった。少しだけ沈黙が続く…。

水瀬さんが心配そうに僕に言った。

「ごめんなさい、怒っちゃった？」

「あ、いや、そんな、怒ってなんかないよ。ちょっとびっくりしちゃうって。」

まさか雨上がってるのに水瀬さんと会えるなんて思ってなかったから。」

僕はやっと言葉らしい言葉を発することができて、少しだけ緊張がとけた。

でも彼女は僕の言ったことに対して不思議そうな顔をして言った。

「そっいえば、どうして私の名前、知ってるの？」

確か、今朝会ったときは名前を言っていないはずだけど。

もしかして同じ中学だった？

それとも近所に住んでるとか？ あー、でもこれは違うかな。

近所に住んでれば同じ中学に通ってたと思うし。だとしたら、

実は過去に何らかの理由で引き裂かれた兄妹とか？

そして二人は運命の再開を果たしたのね。素敵だわー。」

どこをどうすればそのありきたりな韓流ドラマみたいな話に結びつくのか…。

（水瀬さんって結構面白い人だな）。

でも、聞いてもいないのに名前を知っているのは確かにおかしな話だ。

ストーカーなどと勘違い　されてはたまったものじゃない。

僕は自分の名前と、なぜ水瀬さんの名前を知っているかを伝えることにした。

でも、僕がしゃべりだそうとしたそのとき、水瀬さんは「あ！」と何か閃いた顔をした。

「分かったわ。君は超能力者よ。きっと相手が何も言わなくてもわかるんだ。

名前なんか簡単に分かっちゃうんだね。すごいすごい！　もしかして私の心の中、覗かれてる…」

覗けるものなら覗きたい。彼女は僕をからかっているのか？　それとも単にこういう性格なのか？

「あの、自己紹介してもいいかな？」

「え、ああ、そうね。私は超能力者じゃないから君の名前わからないものね。名前、教えて。」

「葛西雄輝。僕が君の名前を知っているのは友達から聞いたからなんだ。

教えて言うておくけど僕は超能力者じゃないからね。」

「ごめんなさい、変なこと言ったね。お友達から聞いてるなら言わなくても分かると思うけど、

言うね。私は水瀬紗希。よろしくね。」

と言って彼女はスッと右手を僕に差し出した。僕の身体に再びスリ

リングな感覚が走った。

握手だよな。今日初めて会ったばかりだよな。なのにこんな自然に…。

気付けば僕の手のひらは汗でびっしょりになっていた。

急いで制服のズボンの腰のあたりで手のひらを拭き、水瀬さんの右手に触れた。

すると、水瀬さんの右手が僕の右手をにぎって握手の形になった。

「よろしくね。葛西くん。」

「よ、よろしく。」

握手なんて、今までの人生でしたことがあるだろうか？

欧米では日常茶飯事なのだろうか（勝手な想像）。

そんな握手を水瀬さんと…。僕は水瀬さんに近づけた気がした。

「葛西くんの家はどっち？」

「こっちの方だけど。」

「じゃあ方向は同じね。一緒に帰ろっか。」

これは夢かと疑った。現実だとしてもうまく出来過ぎた話だ。

もしかして正人が水瀬さんに仕込んだのか？ これは罠か？

「どうしたの？ やっぱりだめかな？」

水瀬さんは困った顔をして言った。だけど僕はこの状況が本物かどうかを確かめたくなくなった。

「水瀬さん…。水瀬さんは今日初めて会った男と一緒に帰るのは平

気なの？

一緒に帰るにしても女の子と帰ったりするのが普通だと思うんだけど。どうして僕なの？」

水瀬さんはさらに困った顔をして言った。

「男の子とか女の子とか、そういうの、関係ないと思うの。葛西くんは面白そうだし、

たくさんおしゃべりできたらお友達になれるかなあと思って。

葛西くんが迷惑だったらごめんなさい。私、ひとりで帰るから。」

「いや、そんな迷惑だなんて、そんなこと思ってないよ。嬉しいよ！！

すごく嬉しいよ。だって入学早々、こんな可愛い女の子と知り合えて、

いきなり一緒に帰ろうなんて言われたら嬉しいに決まってるじゃないか。

ていうか、朝出会ってから今まで水瀬さんのことで頭がいっぱいだったよ。」

思わず恥ずかしいことを口走ってしまった。

しまった！と思ったが、その心配は水瀬さんの笑顔で吹き飛んだ。

「可愛いだなんて言い過ぎよ。でも良かった。そんな風に思ってくれてたんだ。

ありがと。一緒に…、帰ってくれる？」

僕が大きく頷くと、水瀬さんはホッとした様子を見せた。

ゆっくりと夕日のなかを歩きながら僕は今朝の傘のことを話題にした。

「水瀬さんの傘、折れて残念だったね。」

「そうなの。あれ、すっごくお気に入りのお傘だったんだ。中学二年のとき、ある人にもらったの。」

「ある人って？」

僕は『ある人』に反応してしまった。家族か？ いや、違う。家族なら『お父さん』とか

『お兄ちゃん』とか言うはず。なのになぜ『ある人』と表現するのか？

「もらったと言うのは少し違うかな。正確には『貸してもらった』の。…んっ？」

もしかして『ある人』って言うのが気になった？

「うん、かなり気になる。」

「試合が終わって帰ろうとしたら突然雨が降ってきてね。あ、試合ってというのは水泳の試合のこと。」

私、中学の頃は水泳部だったから。天気予報では晴れだって言っていたから傘は持ってこなかったの。

スクールって感じの雨だったからすぐに止むかと思ってたんだけど全く止んでくれないの。

すごく困ったわ。そしたら、ある男の子が『僕は折り畳み傘があるからこれ使いなよ』

って言って私にこの青い傘を貸してくれたの。感激のあまり名前聞くの忘れてしまった。

お礼をしようと思ってもどこの誰か分からなくて。男の子に会ったのもその日が最初で最後。

せめてこの傘は大切に使わなくちゃって思ってた。すごく残念。折れちゃった。」

一本だけ骨のぶら下がった傘。思い出というものはこうもカンタン

に壊れてしまうものなのか。
水瀬さんの切なさが僕にも伝わってきた。このあと、この青い傘は
どういう運命を辿るんだろか。

「水瀬さん、その傘どうするの?」

「あの日の男の子にお礼を言ってから、どうするか決める。」

「でも、その男の子がどこの誰なのかが分からないんだよね。どう
やってお礼をいうの?」

「探そうと、思う。」

「探そうたって手掛かりも何もないんじゃないかな。顔は
憶えてるの?」

「うーん…。憶えてるような、憶えていないような…。」

じーっと、水瀬さんは僕の顔を見つめた。そんなに大きな可愛い目
で見つめられるとかなりヤバイ。

僕は顔が熱くなり、手のひらは再び汗ばんできた。

「ぼ、僕も、その男の子探すの協力するよ。」

僕がその言葉を発した瞬間、水瀬さんの顔が不機嫌になった。

「君、憶えてないの?」

「え、どういう、こと?」

「まだ気付いてくれないかな。どういふことも、こついふことも、
この傘を貸してくれたのは君だよ。」

憶えてないの?あの日のこと。」

あの日のことと言われても、全く記憶にない。僕が中学二年のころ
は陸上部で、

確かに水泳部とは仲良かったけど、違う中学の水泳部の水瀬さんと

は接点がない。

昔、青い傘は使っていたが、それを誰かに貸した記憶はない。非常に気まずい雰囲気になってきた。

僕の忘れっぽい性格が水瀬さんを傷つけている？ いや、僕はそもそも忘れっぽいのか？

と悩んでいる横で、水瀬さんは急にニツコリと微笑んだ。

「葛西くんが思いだしてくれるまでこの傘は大切にしておくね。今日は本当にありがとう。」

私の家はこっちの方だから。また、明日、学校でね。」

少し悪いあと味を残しながら、軽くサヨナラをして僕たちはそれぞれの帰り道へと別れた。

僕と水瀬さんは過去に接点があった？

中学二年。水泳の試合。スコール。青い傘。

これらが水瀬さんと僕を結びつけるキーワード…。

昔の事を思い出そうとしているうちに、空のオレンジ色はすっかりその姿を変え、

夜の闇がすっぽりと覆いかぶさるうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2483o/>

プールサイド

2010年10月15日06時24分発行